

# 細石刃石核の変形

—東峰御幸畑西（空港No.61）遺跡の細石刃石器群より—

永塚俊司

## 1. はじめに

今回紹介する新東京国際空港用地内にある東峰御幸畑西（空港No.61）遺跡は、成田市東峰御幸畑89-1に所在し、1979（昭和54）年～1981（昭和56）年にわたって当センターにより調査が行われた<sup>1)</sup>。旧石器時代から縄文時代の早期を中心に、弥生時代、奈良・平安時代の製鉄跡など各時代にわたって営まれた遺跡である。旧石器時代の石器集中地点はIII～X層にかけて50地点に及び、そのうち40地点がIX～X層段階の環状ブロック石器群で占められる。

今回は立川ローム最上層から検出された細石刃石器群について紹介を行う。

同細石刃石器群は、荒屋型彫刻刀形石器を特徴的に組成し、東北から北陸地方に産する硬質頁岩を利用した削片系の細石刃石器群であり、関東地方において非常に希少な石器群である。近年、石器製作や石器群の系統の議論のみにとどまらず、生業や縄文時代への移行期の問題等で注目を集め、1996年2月には千葉県立中央博物館において開催された第4回石器文化研究交流会で関東各県の集積が図られている<sup>2)</sup>。

このように多くの研究者が注目しているなか、同遺跡の報告書の刊行が長期計画によると数年後に予定されており、発掘開始から20年以上の月日が経過してしまう。未だ整理途上ではあるが、資料の一部を紹介し、新発見の打面再生削片について思うところを述べてみたい。

## 2. 東峰御幸畑西（空港No.61）遺跡

### から出土した打面再生削片

まず、資料発見の経緯について触れなければならぬ。調査は通常、表土（耕作土）除去の後、遺構確認のために精査を行うが、その際に遺構に伴わない縄文時代以降の土器・石器の多くはグリッド一括で取り上げられる。そして上層遺構の調査が終了してから、下層確認のための試掘坑があげられ、下層本調査範囲が決定されるという手順を踏む。しかしながら、今回扱

う細石刃石器群のほとんどは、ソフトローム最上層に遺物が含まれていたために<sup>3)</sup>、旧石器と認識されずに大部分が上層遺構確認作業中に縄文の土器・石器と一緒にグリッド一括として取り上げられたものである。よって資料の大半は、調査後資料整理の段階でその中から抽出されたものであることを予めご了承願いたい。

詳しい石器群の内容や位置づけについては、本論の主旨とは離れてしまうため、それらは本報告に譲るが、説明の都合上、以下にその概要を若干述べておく。

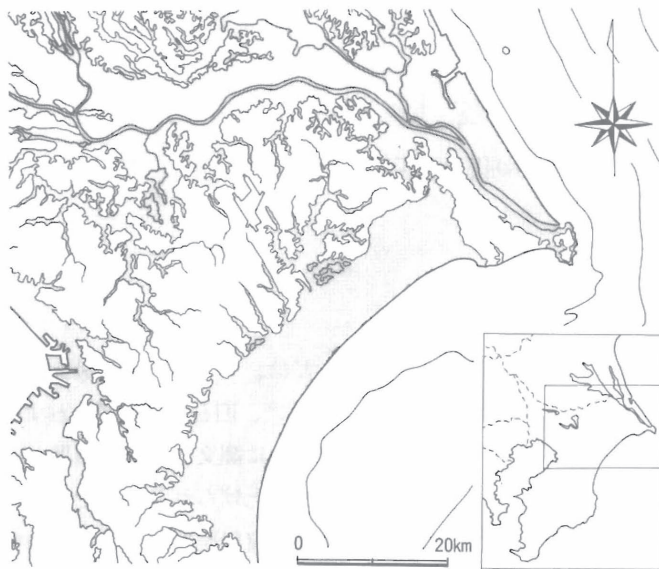
グリッド一括から抽出された資料と一部の点上げされた<sup>3)</sup>細石刃石器群は169点を数え、大まかには5地点の石器集中箇所が確認された（第2図）。石器組成は、細石刃13点、細石刃石核4点、細石刃石核原形2点、細石刃石核削片3点、彫刻刀形石器10点、彫刻刀形石器削片12点、各種搔・削器15点、微細剝離痕のある削片38点、削片・碎片70点、礫石器2点によって構成される（第4図）。細石刃石核は、細石刃剝離作業面（以下、原則として「作業面」と略す）側からの削片剝離によって打面が形成される、「削片系」のものが特徴である<sup>4)</sup>。利用石材の大半は、東北から北陸地方の日本海沿岸地域で産出する硬質頁岩であり、荒屋型彫刻刀形石器、各種搔器・削器を組成し、特殊な石器製作システムを運用する荒屋系細石刃石器群として位置づけられる<sup>4)</sup>。

関東地方においては、同様の石器群が30遺跡で確認されているが、そのうち単独・表面採集資料を除くと検討に耐えうるのは10遺跡にも満たない<sup>2)</sup>。千葉県においては本遺跡と佐倉市木戸場遺跡<sup>5)</sup>、大網白里町大網山田台No.8遺跡<sup>6)</sup>でややまとまった資料が得られているのみである。

今回は、荒屋系細石刃石器群で初めて発見されたとされる打面再生削片を軸に、細石刃剝離に伴う細石刃石核の「変形」資料について紹介を行う<sup>7)</sup>。

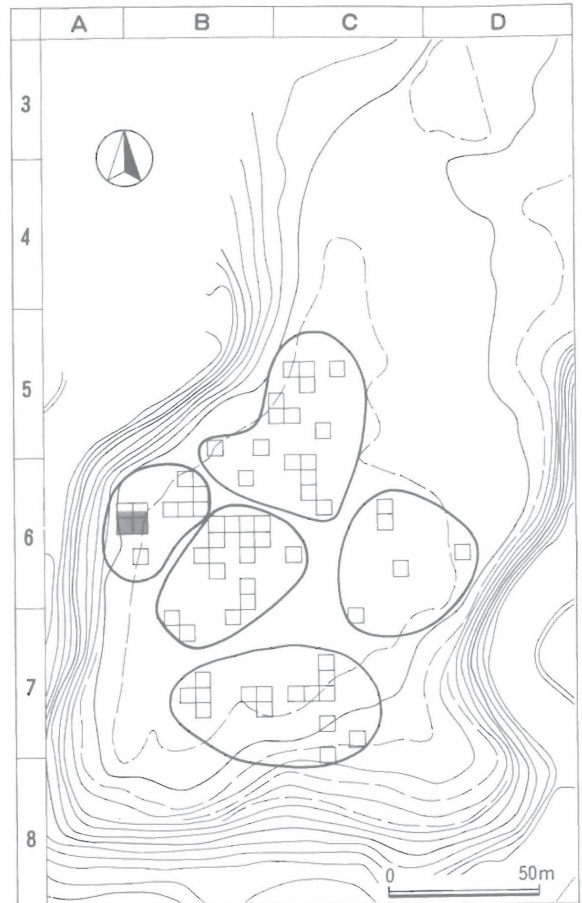
まず、作業面再生を示す資料を挙げよう。

第5図1は背面に3～4枚の槌状剝離痕が観察される作業面再生削片である。細石刃石核の右側面を含む

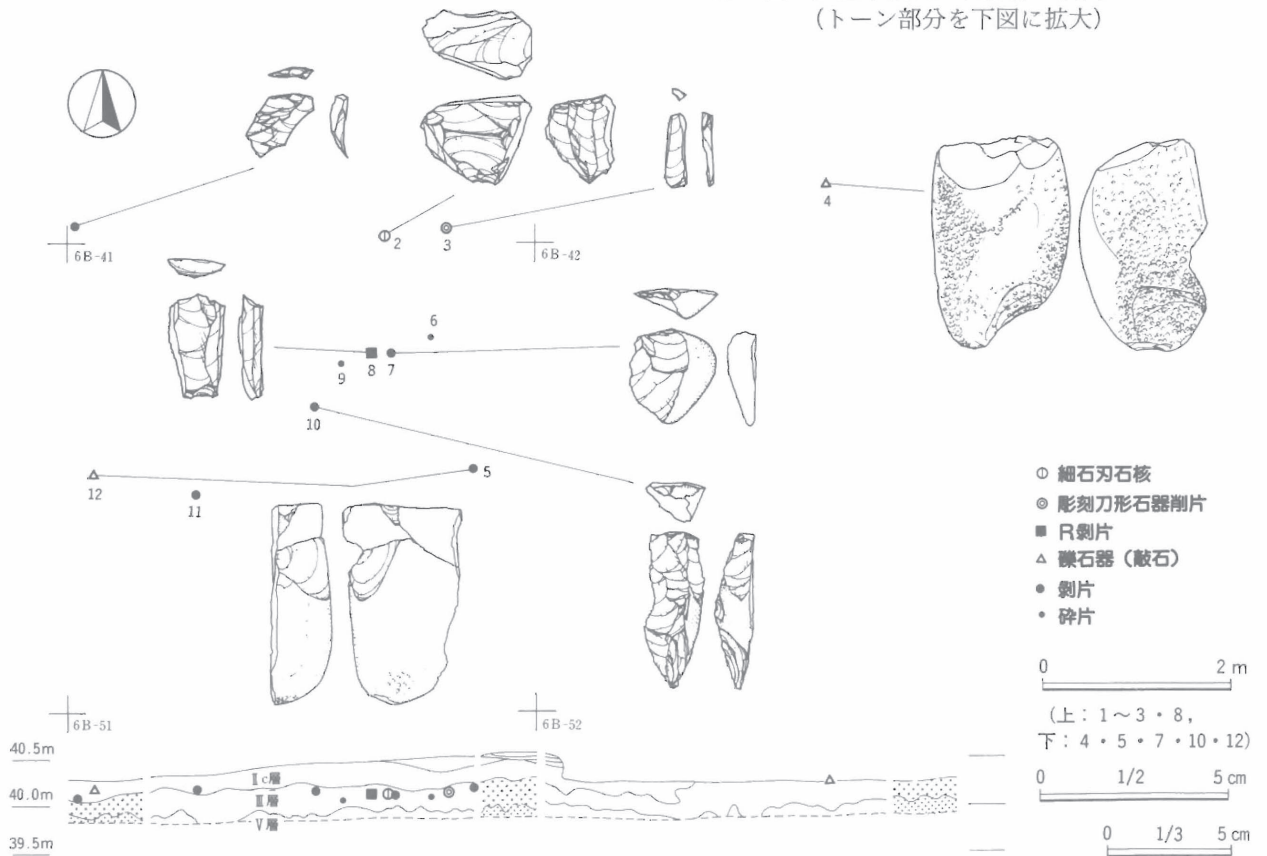


第1図 新東京国際空港の位置

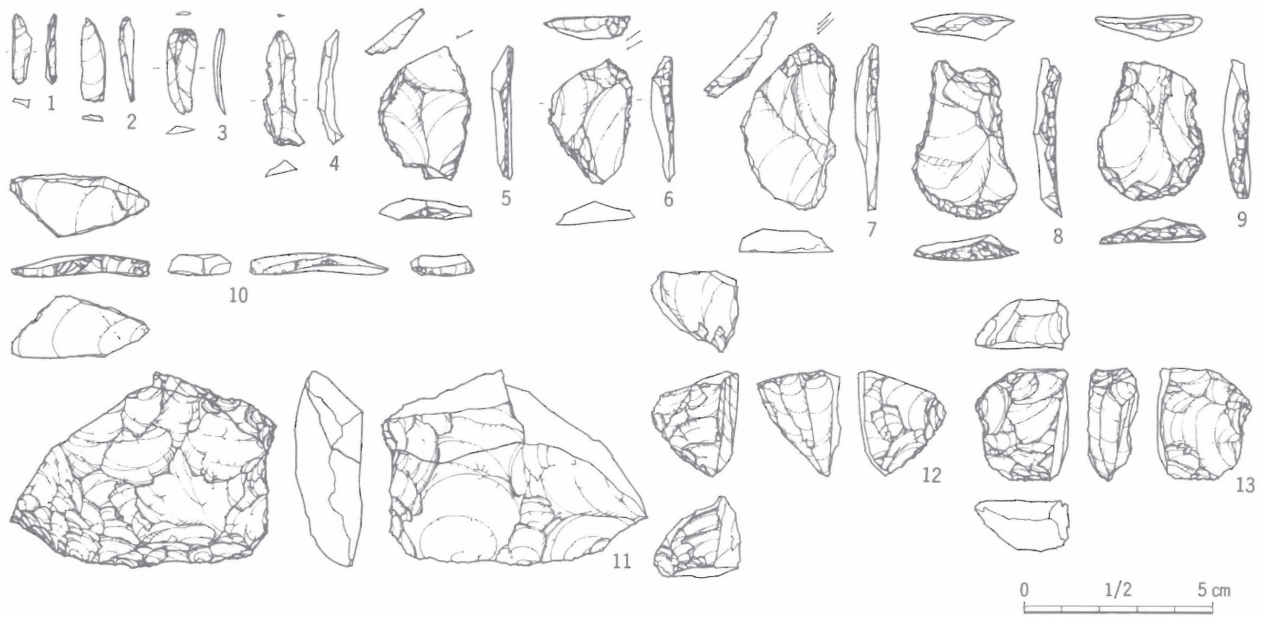
No.	注記No.	器種	No.	注記No.	器種
1	6B31-4	剥片	7	6B41-6	剥片
2	6B31-5	細石刃石核	8	6B41-7	R剥片
3	6B31-6	彫刻刀形石器削片	9	6B41-8	碎片
4	6B32-4	礫石器(敲石)	10	6B41-9	剥片
5	6B41-4	剥片	11	6B41-10	剥片
6	6B41-5	碎片	12	6B41-11	礫石器(敲石)



第2図 荒屋系細石刃石器群の検出グリッド  
(トーン部分を下図に拡大)



第3図 記録された荒屋系細石刃石器群



第4図 主要な出土石器

作業面が剥取されている。再生剥片の打面は平坦面を呈し、細石刃石核の削片剥離面（打面）と思われる。末端はヒンジフラクチャーを呈し、石核は大きく変形していることが窺える。

2は作業面再生直後の細石刃石核である。再生後は細石刃剥離を行っていない。再生剥離によって作業面は大きく剥取されているが、細石刃剥離痕の一部が正面向かって左に観察される。また再生剥離面は「波打つような」状態であり、細石刃剥離による樋状剥離痕が残っていることから作業面再生による作業面の後退はさほどでもない。細石刃石核の打面は通常の削片剥離打面ではなく、横位からの加撃によって剥離されたもので、打点側は側面調整剥離によって剥取されている。剥離面は折断（分割）剥離面の状況を示している。背面も同様で、背縁を形成していたと思われる稜は折断（分割）されている。剥離痕の観察から剥離順序を各側面に分けて観察すると、右側面は、「打面形成→打面からの側面調整→下縁～作業面からの側面・稜調整→細石刃剥離→作業面再生」となり、左側面は、「打面形成→下縁からの側面・稜調整と背縁の折断→背面（折断面）からの側面調整」となる。その中で、下線を引いた剥離作業は明らかに、当初の細石刃石核の厚みを減じるための執拗な打撃を繰り返している状況を示す稜の「潰れ」を見ることが出来る。

第5図3・4は問題となる打面再生剥片である。3は作業面を加撃して剥離された打面再生剥片である。背面を観察すると、打面再生剥離以前に削片剥離面から細石刃石核の片側面に調整を加えていることがわか

る。背面に残る削片剥離痕は、打面再生によるものかどうかは不明。打面には頭部調整が顕著に施された4～5枚の細石刃剥離痕がある。

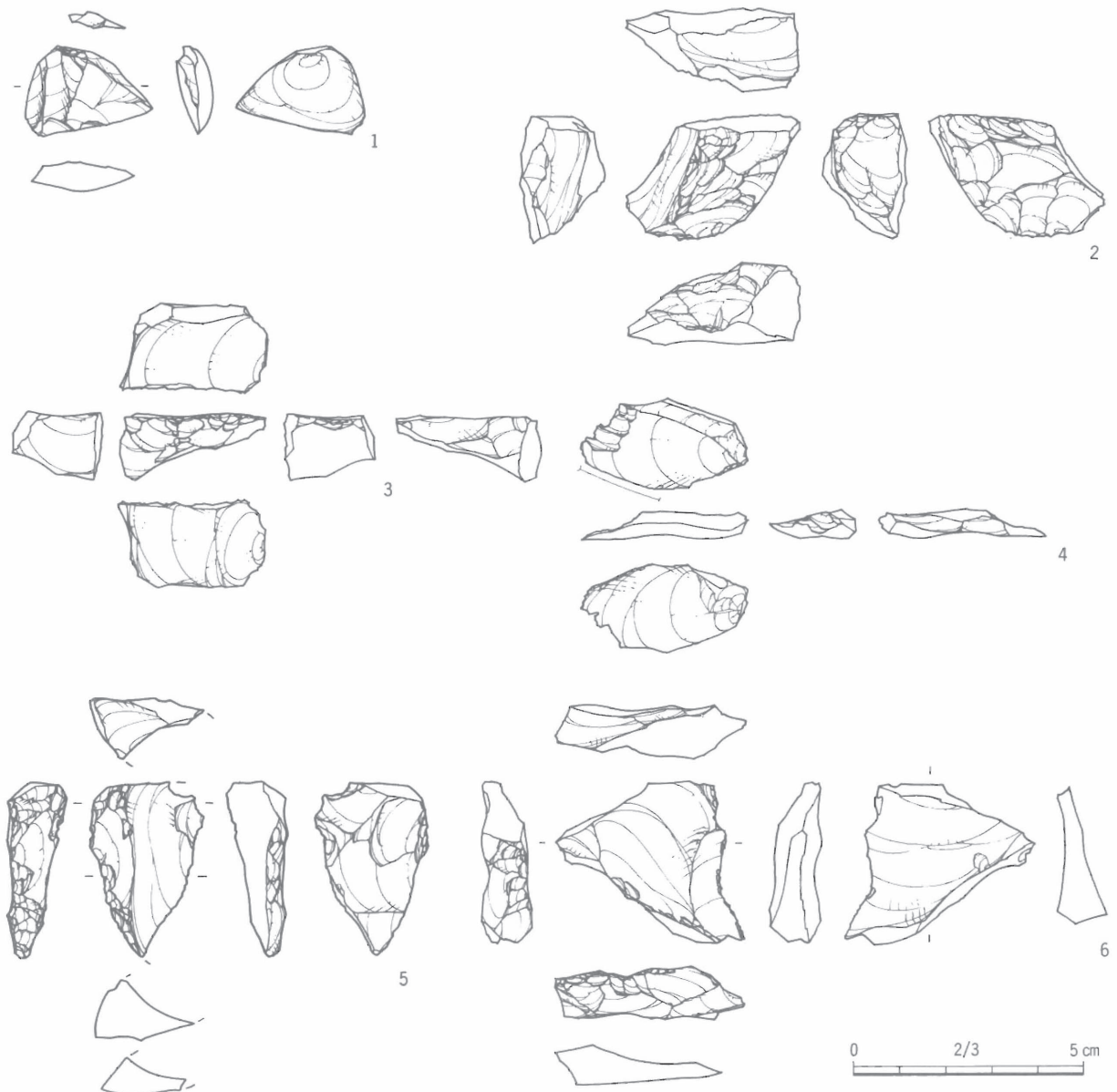
4は縁辺に微細剥離痕が規則的に見られる。背面には石核側面からの調整の後に2枚の打面再生剥離痕が観察される。打面には2枚の細石刃剥離痕が観察されるが、いずれも先の打面再生剥離によって打点部分はずでに剥取されている。

第5図5・6は打面・作業面再生に含まれない細石刃石核の再生剥片である。「削片系」の楔形細石刃石核は打面（削片剥離面）、細石刃剥離作業面、両側面と、下縁から背縁にかけて存在する「稜」によって構成される<sup>7)</sup>。この「稜」を大きく切断したり、稜を巻き込む形で剥取された大形の剥片が抽出の対象となる。

両資料とも、端部に広く「稜」をもつが、剥片の打面側は欠損しており、細石刃石核のどの位置から加撃されたものであるのか確定は困難である。しかし、5は上端に削片剥離面の最端部が残置しており、主要剥離面の方向と合わせて、作業面側から石核背縁に向かって剥離されたものと推定される。欠損面には急角度の調整が施されており、再生剥離後、スクレイパーの素材として利用されたことがわかる。

以上東峰御幸畑西（空港No61）遺跡から出土した、細石刃剥離に伴い細石刃石核から剥離された「細石刃以外の資料」を具体的に紹介した。資料の少なさは否めないが、誤りを恐れずまとめてみると、

①細石刃剥離に伴う石核再生（調整）には、作業面再生（調整）、打面再生（調整）、側面・稜再生（調整）



第5図 細石刃石核の変形に関する資料

の三種がある。

②細石刃剥離作業面自体の再生による石核の変形度は低い、側面を大きく含む作業面再生剥離の石核変形度は高い。

③打面再生剥離は作業面からの加撃によるものが多い。石核側面からのものも若干は存在する。意図した打面が形成されるまで複数回行われることがある。得られる細石刃の長さに直接関与する剥離作業であるので、打面再生による石核変形度はより高い。

④側面・稜再生ともいべき剥離作業が確認された。剥片は下縁～背縁の「稜」を大きく巻き込み、石核の変形度はかなり高い。しかも剥離された剥片は剥片石器の素材としても利用される。ここに、「連動システム」の一端を見ることが出来る。

、という4点に集約される。

つまり、第3図2、第4図12・13、第5図2にみられる小形の細石刃石核は細石刃剥離と石核再生を繰り返すことによって大きく変形したものと理解したい。

### 3. 細石刃剥離の進行に伴う石核再生

ここでは細石刃剥離に伴う石核再生（調整）に関してその技術的・形態的な特徴を述べ、荒屋系細石刃石器群においてどのように考えられてきたのか、概観する。

細石刃剥離の進行に伴う剥離作業には、細石刃石核打面再生と細石刃剥離作業面再生の二つの他に細石刃石核を著しく変形させる「側面・稜再生（調整）」があることが資料の検討により明かとなった。

前二者の再生剥離の共通の目的は細石刃剥離の進行に伴って、作業に適当でなくなった剥離角度を解消（リセット）するものと考えられる。つまり、剥離角度－打角といってもよい－は細石刃石核の打面と作業面によって構成される角度のことをいい、どちらかを一新（再生）することによって剥離角度（打角）の修正を行うことになる<sup>8)</sup>。

**打面再生** 打面再生剥片の背面には細石刃石核打面に直行するかたちで作業面が残されている。また、そのような剥片しか確実に抽出できない。剥片の打面に作業面を残すものと、そうでない資料の二種類がある<sup>9)</sup>。打面再生の目的としては先に挙げた作業面との角度の修正の他に、打点部分の「潰れ」の除去<sup>10)</sup>、「石核打面の水平性確保<sup>11)</sup>」などが考えられる。

打面再生がもたらす、最大の特徴は、細石刃剥離作業面は短くなり剥離される細石刃も当然短くなることが挙げられる。つまり、単純には細石刃剥離の進行→打面再生→細石刃剥離の再開→細石刃の短形化という図式が成り立つ<sup>12)</sup>（第6図）。

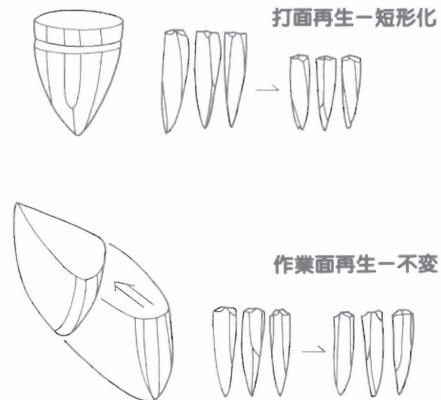
日本における細石刃石器群発見の契機となった長野県野辺山の矢出川遺跡<sup>13)</sup>においても、その当初から検出され特徴的な形態からその後の技法研究のなかにおいても必ず取り上げられてきている。

**作業面再生** 作業面再生剥片は作業面を背面にもつものをさす。通常は、細石刃剥離と同一の打面から大きく作業面を剥離するものが注目され、そのような再生剥片は背面全体に作業面が残るので比較的抽出しやすい。しかしながら、作業面再生作業の主体を占めているのは、打面もしくは底縁を加撃した、石核側面～作業面を一部取り込んだかたちの再生剥離である<sup>14)</sup>。このような再生剥片は抽出しにくいいため、報告時に記載されることが少ない。

作業面再生は、作業面を調整することによって、打角の修正の他、新しい細石刃剥離作業面の確保の役割を担っている。

作業面の長さは、基本的には不変であり、作業面は「後退」し、側面が大きく減ぜられることが多い（第6図）。

**側面・稜再生** この再生作業は上記二者のように打面（削片剥離面）・作業面を剥片背面に残さないため、特定の名称を与えられないできた。しかしながら、打面・作業面再生は細石刃石核を少なからず変形させ、それに伴い、既存の側面・稜では細石刃剥離に対応できなくなることは想像に難くない。つまり多くの場合、



第6図 再生剥離と細石刃の長さ

打面・作業面再生の前後には側面・稜の再生（調整）作業が行われることになる。剥片の特徴としては、細石刃石核背縁～下縁にかけて走る「稜」を有したのものや、その稜を加撃する事によって打面（削片剥離面）を取り込んだ形の剥片などが目立つが、それ以上に、通常のポイントフレイク状の剥片が主体を占めることは言うまでもない。

以上、3つの再生作業についてみてきたが、安蒜氏によると上記のような再生（調整）作業は「石核の修正」呼ばれ、打面再生は、「湧別・峠下・西海・矢出川各技法」において行われ、「ホロカ技法（荒屋・船野・畦原－筆者挿入）」には認められないという。作業面再生に関しては、「細石刃の剥離角を保つとともに、平らとなった打面の先端部を再び尖らす目的」をもち、こうした「作業面の更新」は「他にもみうけられるが、ホロカ技法（荒屋・船野－筆者挿入）により特徴的な在り方をしている」と述べている<sup>15)</sup>。また、織笠氏は「石核再生」と呼び、「側面再調整」と「打面再生」を挙げている。「荒屋・船野」については「打面側から、底面側から、細石刃剥離作業面側からの3種類」の「側面再調整」が顕著に行われ、打面再生は「荒屋・船野」ではみることができないとしている。安蒜氏と名称等で若干ニュアンスの異なるところはあがるが、ほぼ同じ見解を述べている<sup>9・16)</sup>。

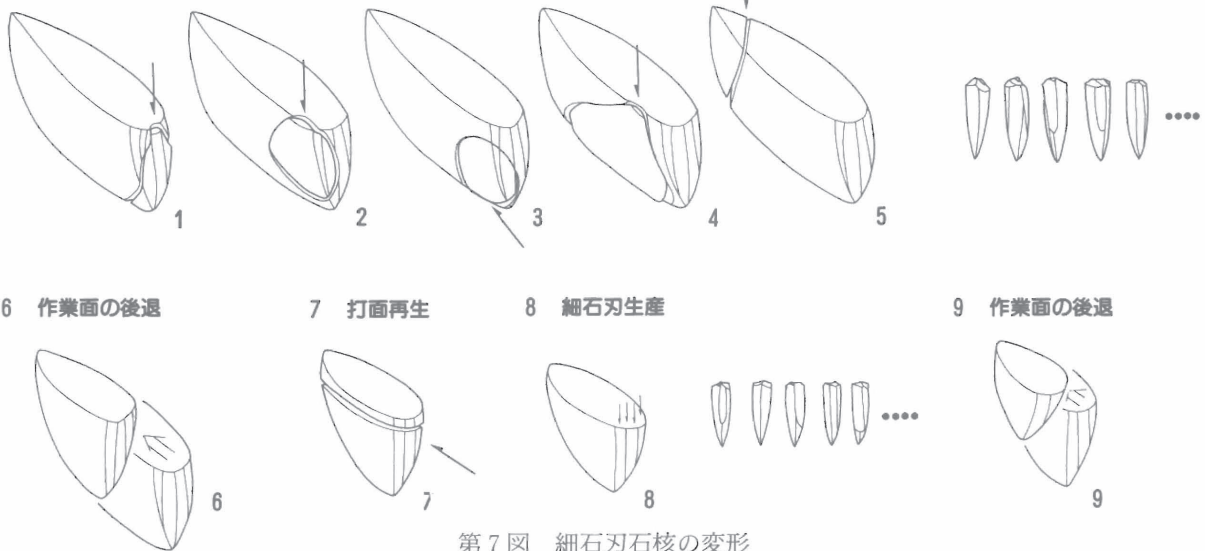
#### 4. 資料の意義－細石刃石核の変形

安蒜・織笠両氏ともに、荒屋遺跡の資料では、打面再生は見られず、作業面再生が頻繁に行われると述べている。ここで再び、東峰御幸畑西（空港No61）遺跡の資料に戻ってみよう。本石器群では、作業面再生剥片の他に、明確な打面再生剥片と、側面・稜再生とも言うべき細石刃石核の再生（調整）剥片が検出された。

1～3 作業面再生

4・5 側面・稜再生

細石刃剝離



第7図 細石刃石核の変形

さらに、そのような再生剝離作業と細石刃剝離作業を繰り返したために変形（小形化）した細石刃石核4点が伴っていることがわかった。荒屋系細石刃石器群の中でそのような変形（小形化）した細石刃石核は、茨城県後野遺跡<sup>17)</sup>、千葉県木戸場遺跡、岡山県恩原遺跡<sup>18)</sup>でその存在を確認できる（第7図）。

では、単一の石材を用い、同様の石器を組成する荒屋遺跡とこれら小形の細石刃石核が検出される遺跡は荒屋系細石刃石器群と一括されるが、上述のような「表現形態」の相異は何に由来するのであろうか。石材環境との関係を視野に入れて、細石刃石核の変形について、数点思いつくことを述べてみる。

Ⅰ. 細石刃石核の変形—細石刃剝離が進行すると、はじめは各種作業面再生によって細石刃剝離を助ける。当然、作業面は直線的に「後退」する。これは従来から指摘されてきたことであり、荒屋遺跡をはじめ、東北～関東地方の荒屋系細石刃石器群において確認することが出来る。そして、作業面再生だけでは細石刃剝離が困難となった場合（多くは前段階の作業面の「後退」により、削片剝離面の「長さ」と石核の「厚さ」「高さ」のバランスが悪くなる段階）に打面再生が行われ、それに前後して、側面・稜の再生が行われると考える。つまり、打面再生、作業面再生、側面・稜再生が三位一体となって細石刃石核を変形させるのである（第8図）。大きく変形（小形化）した細石刃石核は関東地方に散見される。

Ⅱ. 遠隔地石材の宿命—荒屋遺跡をはじめとする東北～北陸にある同石器群は、石材原産地に近い環境にあるため、石材にある程度余裕があり、細石刃石核は究

極的に剝離されることなく「余力を持って」遺跡に残されているものがみうけられる。ところが、石材原産地から数百キロも離れた、千葉、茨城の諸遺跡では、容易な石材供給を期待することができなく、手持ちの石材を最大限に生かすであろうことは想像に難くない。その工夫の一つとして打面再生を伴う、作業面再生、側面・稜再生の三位一体の石核再生が行われたものとする。さらに言及すれば、石核再生は、細石刃生産だけを目的としたものではなく、彫刻刀形石器や搔器・削器等の石器の素材剝片生産をも兼ねていたと考える。つまり「連動システム」は最後の一端においてまで機能していることが窺える。

Ⅲ. 遠隔地へ搬出される細石刃石核—細石刃石核の形態によっては打面再生が困難なものがある。船底形を呈した所謂「非削片系」と呼ばれる細石刃石核（「ホロカ型」）であり、荒屋系細石刃石器群においてもその存在を確認できる<sup>19)</sup>。ある程度石材を贅沢に使える石材原産地に近い遺跡に多い一方で、関東地方に「下ってくる」同石器群の細石刃石核は所謂「削片系」のものが主体である<sup>20)</sup>。換言すればそのような「削片系」が敢えて選択されるとも言えるし、遠距離移動と石器製作の関係において、石器製作工程自体が非常に規制を受けるであろうことは推測される。

上記三点を換言すれば、「原産地近」は「変形小」、「原産地遠」は「変形大」であり、「削片系」は「変形易」、「非削片系」は「変形難」とまとめられる<sup>21)</sup>。

5. おわりに

今回は、打面再生剝片をはじめとする細石刃石核の



第8図 小形化した細石刃石核と作業面再生剥片  
(1 茨城県後野遺跡、2~4 千葉県木戸場遺跡)

変形に関する資料を中心に紹介した。さらに、旧来の細石刃石核の形式分類では明らかにされ得なかった、遺跡間の表現相違の要因を細石刃石核の変形と石材環境という視点から眺めてみた。

筆者も安蒜・織笠両氏と同様に、荒屋系細石刃石器群には打面再生が行われることはないと言ったことがある<sup>4)</sup>。しかしながら、千葉県木戸場遺跡や茨城県後野遺跡、そして本遺跡にある小形の細石刃石核について、単に細石刃剥離の進行と作業面再生による作業面の「後退」と片付けるには、あまりに細石刃石核の変形度が大きいため、どこか心に引っかかるものがあった。そんな折に、本遺跡の整理担当となった筆者は改めて資料整理を行い、新たな資料の追加を行った結果<sup>22)</sup>上述のような見通しを得たわけである。

本来ならば「ニューアーケオロジー」が生み出した成果の一つである「変形論 (reduction theory)」について言及しなければならないところであるが、筆者の不勉強と紙面の都合上、敢えて触れなかった。

本報告に向けて課題は山積みであるが、大方の御批判・御叱声をいただければ幸いである。

なお、本論を草するにあたり、県立中央博物館の橋本勝雄氏には貴重な御助言を頂いた。未筆ながら記して感謝の意を表します。

注1 勸千葉県文化財センター1982『千葉県文化財センター年報No.6』

注2 石器文化研究会1997『第4回石器文化研究交流会—発表要旨—』

島立 桂・永塚俊司1997「千葉県における北方系細石刃石器群」『第4回石器文化研究交流会—発表要旨—』

注3 第3図に旧石器時代の石器集中地点として点上げさ

れた石器について平面垂直分布と石器実測図を掲載した。石器分布は6 B-41に集中し、8点の遺物の出土位置が記録されている。その他に、同グリッドでは一括資料の中から30点の石器が抽出されており、一番大きなブロックを形成していたと思われる。出土層位は、III層上半部~IIc層にかけて分布している。

出土石器は彫刻刀形石器の削片(1)、R削片(2、作業面再生削片?)、細石刃石核(3)、剥片(4・7・8)、礫石器(5・6)があり、礫石器は両者ともに敲打痕が観察され、その後削片剥離が行われている。特に6は一部に研磨痕も観察され、山形県角二山、群馬県頭無、千葉県大網山田台No.8、木戸場に組成する礫石器と同類のものと考えられる。石材は、硬質頁岩(1~4)、砂岩(5・7・8)、安山岩(6)である。

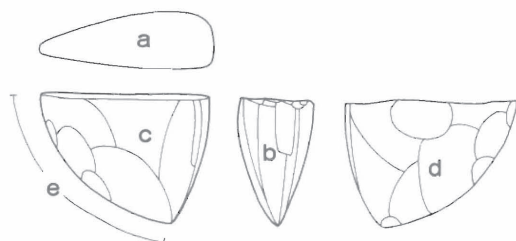
注4 永塚俊司1997「荒屋系細石刃石器群の一つの定点」『人間・遺跡・遺物』3

「東北~北陸の日本海沿岸地域に産出する硬質頁岩を単相的に選択し、石器製作に『連動システム』を有効的に運用した、荒屋型彫刻刀形石器を特徴的に組成する細石刃石器群」を荒屋系細石刃石器群としている。連動システムとは、細石刃生産とその他の削片石器の素材削片生産が一体化した石器製作構造のことをいう。単純にいうと、細石刃石核を準備する段階で剥離される削片を利用して彫刻刀形石器・各種搔・削器を製作することをいう。また、荒屋系細石刃石器群から検出された細石刃石核を「削片一分割系」と呼び、一括しているが、本論で度々登場する「削片系」は削片剥離後に細石刃剥離を行うという一般的な名称として使用していることを、予め断っておく。

注5 橋本勝雄1988「研究ノート 千葉県佐倉市木戸場遺跡A地点「第1・第2ユニット」から」研究連絡誌4

注6 田村隆1994『大網山田台遺跡群I』さんぶ考古資料刊行会

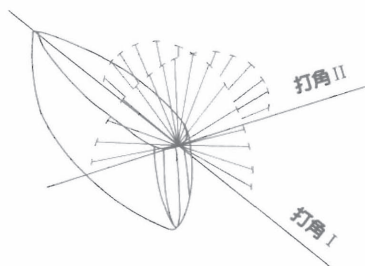
注7 細石刃石核の各部名称については以下のとおり。



a. 打面(削片剥離面) b. 細石刃剥離作業面  
c. 左側面 d. 右側面 e. 背縁~下縁(の線)

注8 細石刃剥離を行うときの剥離角度は以下の2つの方向に分離される(下図)。打角Iは従来から「打角」と呼ばれているものであり計測位置によって数値は異なる。打角IIは細石刃石核の作業面を正面にみて加撃する方向と打

面で構成される角度のことをいう。「水平打面」等の名称で多少意識されてきているが、計測となると扱った論放は皆無である。なお、ここで言う打角Ⅰ・Ⅱは、実際の計測を意識したものではなく、「打角の修正」において、これら2方向の角度が重要な意味をもってくるということをいいたい。



注9 織笠 昭1990「西海技法研究序説」東海大学紀要文学部53

織笠氏は打面再生の際に生ずる「削片」には「縦長削片・横長削片・円盤状削片」の3種をあげているが、名称からは削片（削片）の形態を呼称基準にしているようであるが、その実体は、削片の背面・打面における細石刃剝離作業面の位置関係にその基準がある。

注10 大沼克彦1995「湧別技法における石核打面の再生について」『王朝の考古学 大川清博士古稀記念論文集』

注11 橋本勝雄1984「細石刃技法」考古学ジャーナル229

注12 栗島義明1993「細石刃文化と石材環境」『細石刃文化研究の新たな展開』II

細石刃の短形化については、石材環境との関係で詳細に検討されている。その一方で、細石刃剝離の進行に伴う細石刃の長形化がある（下図）。本論でも述べているように通常、打面と作業面の角度は石核調整を行って一定に保たれるが、何かの要因で調整剝離が行われなかった場合、打角が次第に鋭角になっていくことがある。それに伴い、作業面は、より長くなり、剝離される細石刃も当然長いものが得られることになる。細石刃石核の廃棄直前の段階で見られる現象と考えて良いだろう。



細石刃の長形化

注13 戸沢充則1964「矢出川遺跡」考古学集刊2-3

「石核再生削片」と呼び、石刃技法との共通点を指摘。

注14 それら以外に側面を加撃して作業面を大きく剝取するものや、作業面を直接加撃して側面を調整することもある。

注15 安蒜政雄1979「日本の細石核」駿台史學47

注16 織笠 昭1979「中部地方北部の細石器文化」同上

注17 後野遺跡調査団1976『後野遺跡』勝田市教育委員会

第7図1について、報文中では「舟形の細石刃核」とは思われないと述べているが、同一母岩に「舟形の細石刃核の調整削片（ポイントフレイク—筆者挿入）」があるとして、結論を保留している。最近では栗島氏が「在地の関東的な様相」をもった「非削片系」の細石刃石核と位置づけ「湧別技法の関東地方への波及の当初の姿を伝える」一つの根拠としている。「在地的」の解釈については様々な捉え方があるが、筆者がここで述べている細石刃石核の変形とは基本的に異なるものである。

注18 岡山大学文学部考古学研究室1996『恩原遺跡』

注19 筆者が呼称した「削片—分割系」は石器製作の流れの中で分離するのは困難と考え、「削片系」と「非削片系（分割系）」を結果的に一括したものであるが、個々の細石刃石核を検討する場合には、不都合であるため、ここでは2つの名称を分けて使用している。

注20 橋本勝雄1993「略説・日本細石器文化研究の現状と課題」史館24

橋本勝雄1997「後期旧石器時代の遺跡分布と立地」考古学ジャーナル413

橋本氏は「ホロカ技法では打面再生をほとんど行わず、側面調整によって代用する。また細石刃生産途上の石核の形態変異が大きく、細石刃の生産性は高いが、大形の素材を必要とし、素材の変形度が高く、ブランクの製作時の石材のロスも大きい。」と述べ、「削片系」との関係について、「可搬性に富む削片系の管理的性格と素材に規制がないホロカ型の便宜的性格」の2面性を強調している。

注21 このような図式は一部の都合のよい資料を抜き出し、石材原産地と石核の変形についてその関係をまとめたに過ぎない。関東においても変形（小形化）しない細石刃石核や大形（変形小）の彫刻刀形石器、細石刃が目立つ。一方で荒屋遺跡では多量の彫刻刀形石器（変形大）と多量の彫刻刀形石器削片がみられる。とにかく遺跡間の表現相違を規制する要因は複雑な様相を呈し、一筋なわけでは行かない。

注22 第4回の石器文化研究発表会の発表要旨に本遺跡の荒屋系細石刃石器群の石器組成表を掲載したが、改めて、グリッド一括資料や遺構覆土内の石器を確認した結果、新たに70点近くの資料が増えた。多くは、削片・碎片の類であるが、その中に第5図3が含まれていた。発表要旨作成時にすでに第5図4は発見されていたのであるが、私の先入観も助け、果たして本当に細石刃石核の打面再生削片なのかと疑っていた。そこへ第5図3という確実に打面再生削片と言える資料を確認したことによって、本論を起すこととなったのである。